

市民記者が行く！ 広報サポーターレポート

吉良さんの実像を追って



広報サポーター
加古文雄さん
(刈宿町)

吉良さん（吉良上野介義央を地元では親しみを込めて呼んでいます／写真①）は、黄金堤の築堤（写真②）や用水路の開削、富好新田の開発、年貢の減免などを行ったことから、名君とたたえられています。今回は、吉良さんに関する史料探しに奔走した結果を報告します。

戸城・松の廊下事件」の後からです。浅野内匠頭は、刃傷後の取り調べで、どうして「遺恨があった」と言わなかったのか。このことが疑問で仕方がありませんでした。歌舞伎、演劇、映画、テレビ、小説、浪曲、落語など、あらゆる媒体において、浅野が刃傷に及ぶとき「この間の遺恨覚えたるか」と言っている。このときに浅野を制止した梶川与惣兵衛が書いた史料が、東京大学図書館にありました。『元禄十四年三月 梶川与惣兵衛日記』(写真③)です。何度、読み返しても「この間の遺恨覚えたるか」は出てきません。遺



1



2

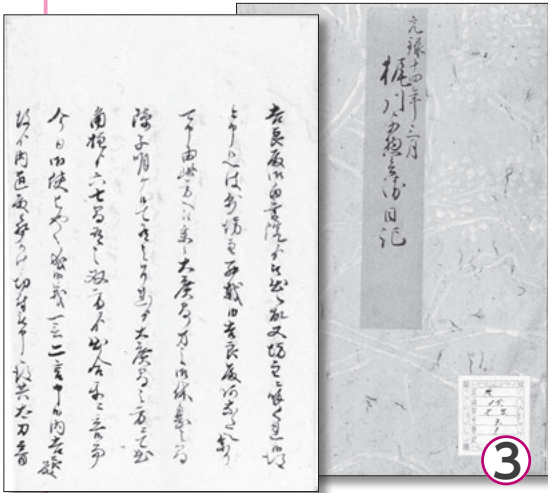
恨など結局なかったのではないかとこの考えが起りました。

しかし、あらゆる媒体が「この間の遺恨覚えたるか」を使っているのは、どこかに史料があるはずだと考え、それを追い掛けました。すぐには見つかることはできませんでしたが。何度挫折し、諦めかけていたところで、ついに発見することができました。それは、前述の図書館の隣、東京大学史料編纂所にあったのです。これが本当の「灯台（東大）もと暗し」です。

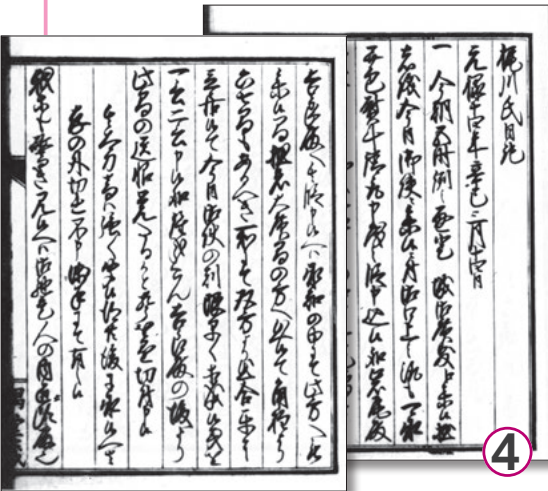
『向山誠齋雜記及び雜綴』（全218冊／写真④）。向山誠齋は、幕府の御家人で勤務の合間を縫って片っ端に筆写したこの雑記によって、後世に知られることになりました。この中の丁未（弘化4／1847年）雑記が、これだけでも179冊あり、それを一冊一冊当たって92冊目にありました。そこには「この間の遺恨覚えたるか」として、書かれていないものと書かれているものが確認できました。しかし、既述のような媒体の遺恨一本槍はどうかと思います。正と悪がはつきりし、大衆に受けるからでしょうか。それで遺恨についても、塩田説など多くの説が考え出されたのでしょうか。

こうして、一方の史料だけで悪役に仕立てられてしまった吉良さん。今こそ吉良地区だけでなく市民全体で、そして、吉良サミットに参加される岩手県一関市・山形県米沢市・東京都墨田区・長野県諏訪市の皆さんと共に、吉良さんの名誉回復を図っていただきたいと考えます。

広報サポーターは、公募により選ばれた市民記者です。これからも市民の目線で、市内各地のイベントなどを取材していただきます。



3



4